モンゴル帝国の興隆と衰退~大英帝国との比較を通して~

2018年度インターゼミ アジアダイナミズム班

学部生:森川和洋•西條史都•小出幹•乳井優

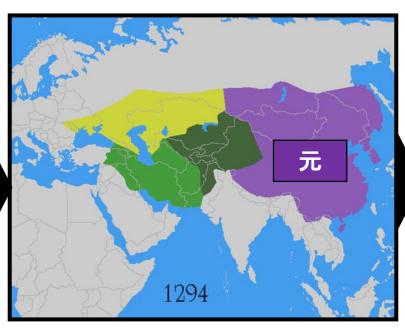
大学院生:米山憲二郎・光永和弘

卒業生・修了生:越田辰宏・塚原啓弘・山口夏実

指導教員 : 金美徳 教授・水盛涼一准教授・加藤みずき専任講師

モンゴル帝国「13世紀の興隆」から「14世紀~17世紀の衰退」







出典: https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Mongol Empire map.gif

13世紀 最大の版図

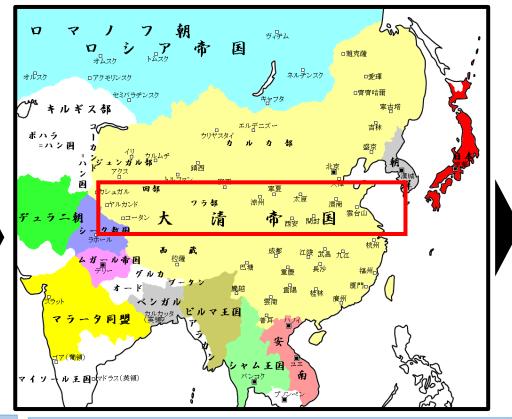
モンゴル帝国の 「繁栄」

1294年クビライ死去~ 1368年大明帝国成立 モンゴル帝国の 「衰退」が始まる

出典: https://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%8C%97%E5%85%83

1368年大明帝国成立 モンゴル帝国(元)は 「北元」に

17~19世紀の大清帝国は、モンゴル帝国(元)の正統継承帝国



1911年モンゴルは 大清帝国からの独立宣言

1912年 大清帝国滅亡

1635年北元滅亡

モンゴル帝国最後 の皇帝、第41代「エジェイ・カーン」 1636年大清帝国成立

- ・満州人、モンゴル人、漢人の帝国
- ・皇帝は満州人
- 初代皇帝ホンタイジの妻は、チンギス・カーン末裔

モンゴル帝国の「興隆」に関する問題意識

1. なぜモンゴル帝国の戦い方は、これほど後世に影響を及ぼしたか。

(巧妙な計画、馬に乗りながら弓を射る技術)

2. モンゴル民族の忍耐力は、どのようにして育まれたか。

(火を通さない肉だけ食べて10日間も行軍していた、口に入るものならなんでも食べていた、泥水も啜っていた)

- 3. モンゴル帝国の支配下に置いた国々を、自分たちと対等の仲間と見ることができる懐の深さは、どのようにして生まれたのか。
- 4. チンギス・カーンの行動は、破壊的かつ残虐的であると史実上言われているが、彼の行動が偉業として残り、人々に慕われていたのは、なぜか。
- 5. チンギス・カーンの高原統一の頃から、戦わずして、指導者同士の話し合いだけで解決し、人命を損なうことを回避していたが、それはなぜか。

モンゴル帝国の「衰退」に関する問題意識

- 1. モンゴル帝国の衰退に影響した後継者争いの原因は、何か。 (リーダーの選び方による影響)
- 2. カーン(皇帝)が変わるたびに影響力が弱まったのは、なぜか。 (相続による資産の分配による影響)
- 3. モンゴル帝国の宗教的多様性は、なぜ崩壊したのか。 (モンゴル帝国は、宗教の多様性(※現在までの研究で5つ以上確認)を認めることで興隆したが、 チベット僧の専横が民衆の反乱一因になった)
- 4. 衰退の一因である疫病の蔓延は、どれほどの規模であったのか。 また、それらを防ぐことはできなかったのか。

注記:カーンはモンゴル帝国皇帝で世界で唯一の地位、カンは帝国を構成する諸国の国王

モンゴル帝国の「衰退」に関する問題意識

- 5. 経済・通貨システムの崩壊は、モンゴル帝国の衰退にどのような影響を 与えたのか。(近代西欧型社会システムに先んじた先見性、通商インフラ整備が疫病の蔓延を 助長したという二面性をどう捉えるか)
- 6. モンゴル帝国以降の各国は、モンゴル帝国の再現を狙い、 再びのユーラシア興隆を目論んでいたのではないか。 (15世紀以降の各帝国の版図拡大、統治システムはモンゴル帝国を倣っていたのか)
- 7. カーン(皇帝)の影響力と統治システムは、15世紀~17世紀の帝国、 さらに現代の企業統治における繁栄·衰退に通じるものはあるのか。
- 8. モンゴル帝国の没落は、体制崩壊としての「衰退」と見るか、或いは 経済循環のような好不況としての一時的「不況」と見るか。 歴史的評価の物差しは何か。

注記:カーンはモンゴル帝国皇帝で世界で唯一の地位、カンは帝国を構成する諸国の国王

論文目次

- 1. はじめに
- 2. 13世紀~19世紀までのモンゴル帝国とユーラシア史の変遷
- 3. モンゴル帝国の興隆の要因 ~13世紀を中心に~
 - (1)理想
 - (2)忍耐力
 - (3)連帯性
 - (4)戦術
 - (5)物流
 - (6)情報ネットワーク
 - (7)ガバナンス

<u>論文目次</u>

- 4. モンゴル帝国の衰退の原因
 - (1)後継者と相続
 - (2)疫病と宗教
 - (3)経済システム
 - (4)15世紀以降に遺されたもの
- 5. 大英帝国との比較
- 6. おわりに 本研究から学ぶ現代的意義

モンゴル帝国の興隆の要因

> 強力なリーダーシップ

モンゴル帝国の将軍たちは練達の戦術家であり、軍事の天才、エリートという べき人物が多く存在した

緊急時には臨機応変に計画を変えるが、あらかじめ綿密に計画を立てていた

> 宗教・文化に寛容

モンゴル帝国は勢力を広げた後、積極的に行政機構を整えた モンゴル族は、極めて客観的冷静で、自国の行政機関はまだまだ欠点があると 問題意識を掲げていた

そこで、モンゴル族ではない外国人を行政に参加させ、「ダルガチ」と呼ばれる 軍事総督を置いた

> 広大なネットワーク

広大なネットワークを使うことにより、敵国の情報を得ることができた そして相手が軍事的に弱っている、または内情が混乱している時に攻め込むこと により敗北するリスクを減らし容易に戦争に勝利することができたのであった

語り継がられる戦略、戦術、戦闘

- □ モンゴル族は、大規模な戦闘は避けた
- □ 小競り合いを繰り返して相手を疲労させ、士気の喪失を目論んだ
- □ 歯が立たないと感じた相手には、退却するふりをして敵の迎撃を誘った
- □ こうすることで敵は統制、士気を失うので、こちらが戦いを挑みやすい場所を選んで 罠を仕掛け、相手の不意をついて、振り向きざまに弓を放つ

これは「パルティアン・ショット」と呼ばれる騎射戦法

また一方で、衝突を避けられない側面は、兵隊を周囲の高台にひそませた

中央に外国人の兵士など、最も弱体な部隊を配置した

中央の外国人兵士は最初の一撃で壊滅する 両翼、近辺には選ばれた精鋭が配置され、 彼らが一斉に攻め込む→大がかりな包囲戦をしかけた

さらに、敵をだますために、にせの野営地を作ったり、人にいないところに篝火を焚い たりした藁人形に兵隊の服を着せたり、捕虜を人間の砦にしたりしたこともあった

モンゴル帝国(チンギス・カーン)についてのイメージの違い

多くの人→残虐、チンギス・カーンは残忍非道な征服者 (負のイメージ)

一部の人→戦わずして、指導者同士の調停で解決。人命を損なうのを回避していた。

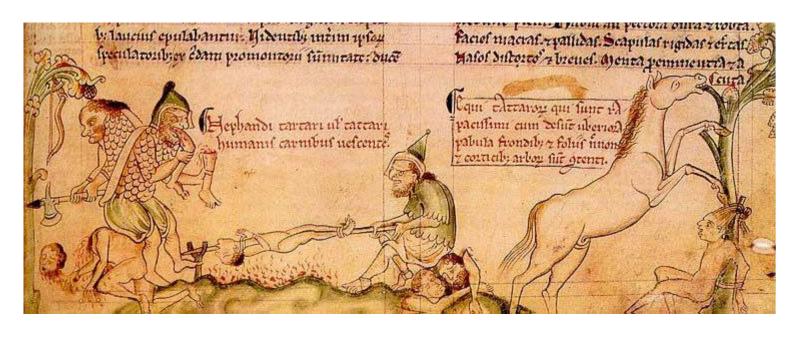
~このようなイメージの違いが生じる理由(これまでに分かったこと)~

- ・モンゴル帝国への負のイメージを作り出し、煽り立てたのは、近代ヨーロッパ
- ・ヨーロッパ諸国は、アジア諸国を劣等視していた→モンゴル帝国に対して負の先入観 を持っていた
- 19・20世紀は、欧米本位の世界像が浸透していた
- ・モンゴル帝国の歴史についての負のイメージは、欧米による価値付けを前提とする歴 史家たちに引き継がれた
- ◎このように、ヨーロッパ諸国や欧米の考えを、正しい、最も良いとする考え方は、現代に通じる部分が多い

ヨーロッパ人がイメージするモンゴル帝国(チンギス・カーン)

モンゴル軍によるわざわいのニュースが、ヨーロッパ中に広がり、 余すところのない破壊と破滅の予言が飛び交った

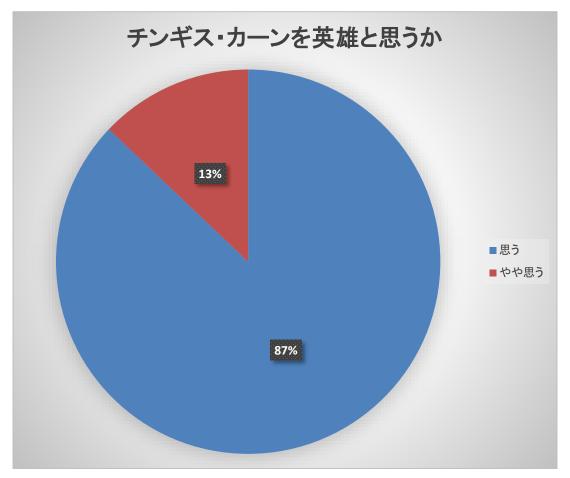
- □ ハンガリーでは、モンゴル族は「犬の顔をしたタタール人」であると述べた
- □ オーストリアに住むあるフランス人修道士は、モンゴル人の女を強姦している。 はヨーロッパ人の女を強姦してから犠牲者の乳房をひきり、この「珍味」を「犬の頭」をした王子にさしだす、と書いた

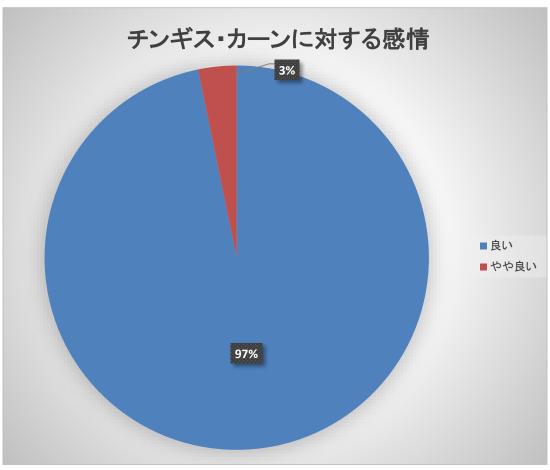


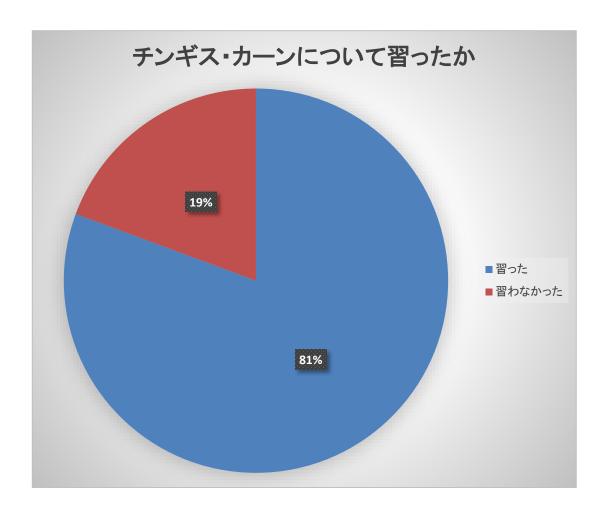
犠牲者を料理し、むさぼり食うモンゴル人を誇張して描いたもの。女性捕虜には死より ひどい運命が待っていた(マシュー・パリス『大年代記』より)。

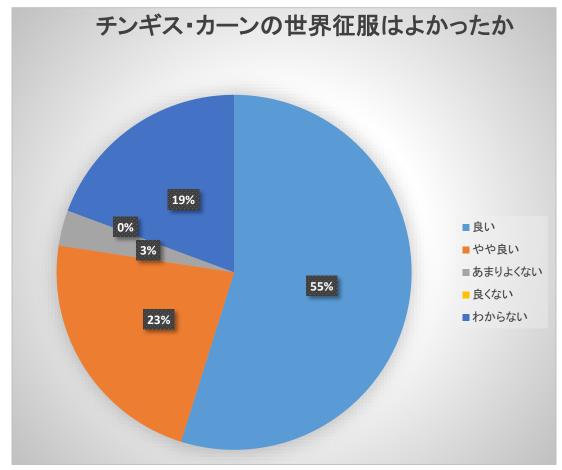
出典:遠藤利国訳『図説 モンゴル帝国の戦い―騎馬民族の世界制覇』東洋書林、2001年6月

モンゴル人に対してのアンケート









現代モンゴルでチンギス・カーンのイメージは肯定的であり、ほとんど否定的な意見は見られなかった。

問題意識:モンゴル帝国の衰退は、 <u>「リーダーの選び方による影響があったので</u>はないか?」

■「クリルタイ」によるカーンの選出

ロ クリルタイとは?

「皇帝の選出」、「遠征」、「法制定」などの重要事項を決定する 皇帝一族や王侯貴族で構成された最高意思決定機関。

<u>ロ カーン選出の原則</u>

モンゴル帝国という共同体と国家の幸福を最もよく導くと 認められた者。



結果、選出された「カーン」には、 モンゴル帝国全体を統率できる絶対的な権力が 与えられる。

口「カーン」の代替わりによる影響

「カーン」の権力は一代限りで、新しい「カーン」が即位すると、 中央政府をはじめ、**一切の機構における官僚や吏員の顔ぶれが一** 変。

また、前のカーン時代に得た既得権は、保持できなくなる。

ドラスティックな政権交代によって、 「継続性のない、不安定な政治」を招いていた。

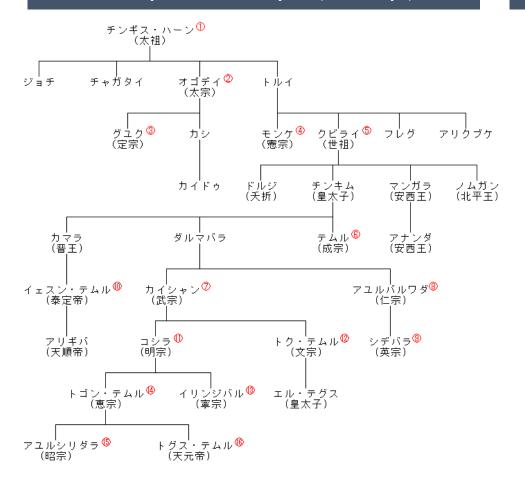
□ 無視される「カーン」選出の原則

野心に満ちた支配者層たちにとって、「カーン」の代替わりは絶好機。

「カーン」擁立の功績をあげ専権を得るため、**自らに有利に働く「候補」を推した**。

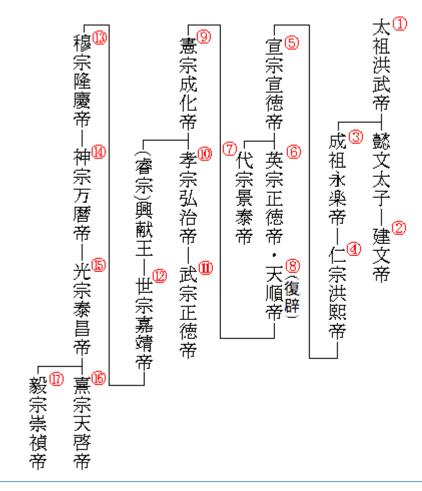
新しいカーンを選ぶたびに、権力闘争による内紛が発生し た。

モンゴル帝国 1206年~1368年(162年)



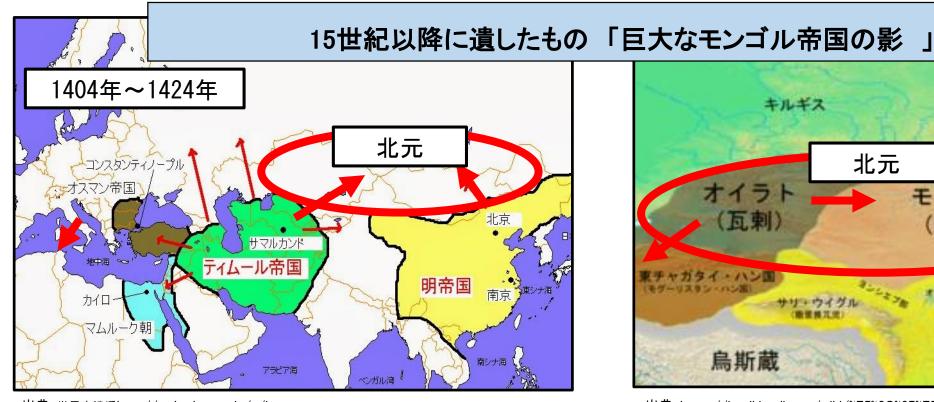
「クリルタイ」による「カーン」の選出は、争いを生む要 因となった。

明 1368年~1644年(276年)



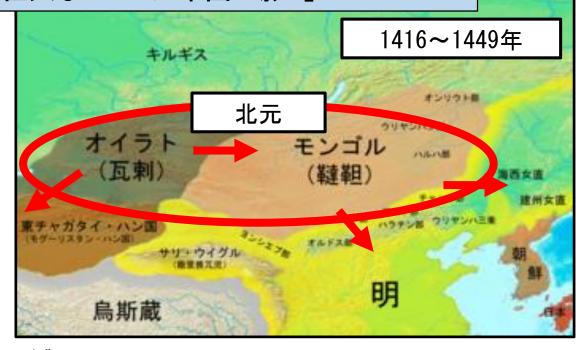
明は、「皇位継承制度」が確立されており、後継者争いによる内紛は、少なかった。

問題意識:モンゴル帝国以降の各国は再びのユーラシア興隆を目論んでいたのではないか



出典:世界史逍遥http://ord.yahoo.co.jp/o/image

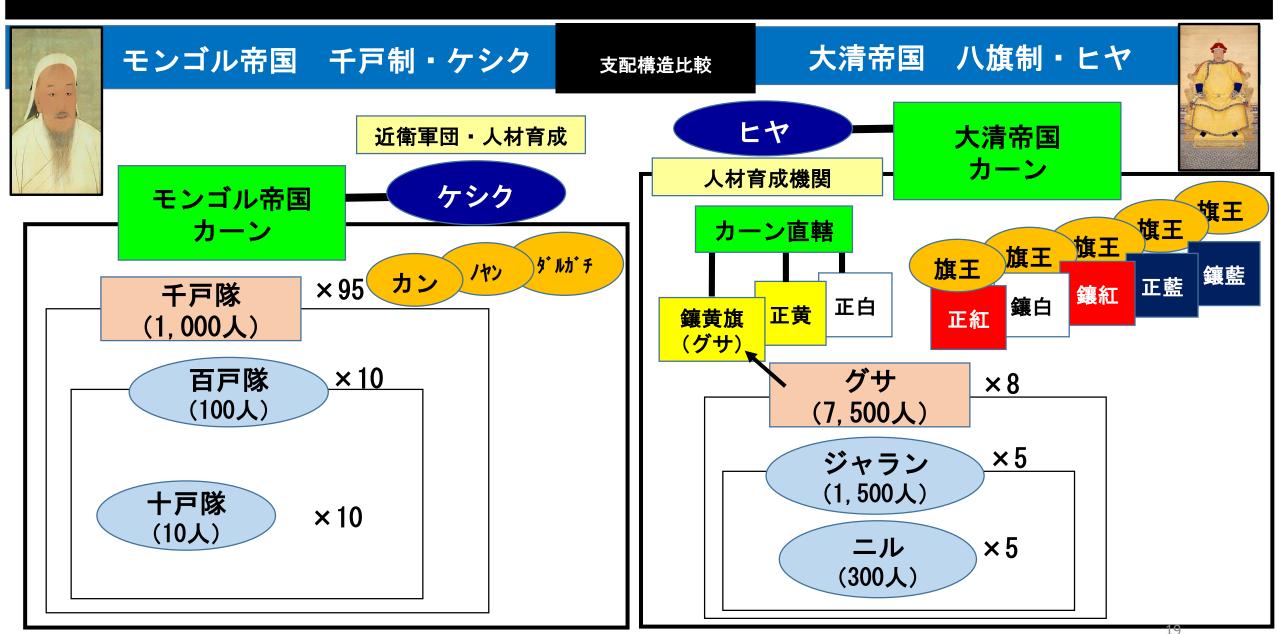
- ・ティムールはモンゴル帝国の西半分を征服
- 東方征服ヘモンゴル高原へ進軍(1404年)
- 大明帝国・永楽帝は北元へ5度の遠征(1410~1424年)
- ・ティムール帝国、大明帝国もモンゴル帝国の再現を目論む



出典: https://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%8C%97%E5%85%83

- オイライト族・モンゴル族が対立
- ・オイライト族が北元統一(1416年)
- ・オイライト族は女真人(満州)・東チャガタイ・カン国を 制圧し、モンゴル帝国の再現を目論む
- オイライト族、明を攻撃(1449年土木の変)

問題意識:カーン(皇帝)の影響力・統治システムは15~17世紀の帝国、現代の企業統治に通じるものはあるか



出所:筆者作成

出所:筆者作成

八旗・旗王



恭親王・溥偉(鑲藍旗)



慶親王・載振(鑲藍)



粛親王・善耆(鑲白)



莊親王・溥緒(鑲紅)



川島芳子



鄭親王・昭煦(鑲藍)

川島芳子(1907~1948)

粛親王・善耆の第14王女

川島浪速の養女

本名:愛新覚羅顕牙

清朝の再興を画策し 上海に渡り、日本軍の 工作員として諜報活動 に協力。

モンゴル将軍パプチャップ の次男カンジュルジャップと 結婚。のちに離婚。

日本の敗戦後、中国にて 処刑される。

問題意識:経済・通貨システムの崩壊は、モンゴル帝国の衰退に どのような影響を与えたのか

経済大国としてのモンゴル帝国

・ユーラシア全土に張り巡らされた物流網



- ・ 国家運営の基軸に据えられた「経済」と「流通」
- 軍事組織、行政機構そして陸・海上の物資輸送網、それら全てが国家による広域経済の掌握を実現する手段であった。



- のちに西欧で実現する重商主義に極めて近い体質を持っていた。 (貨幣経済)
- 国家主導でありながら、自由経済を基本に据え続けた。

問題意識:経済・通貨システムの崩壊は、モンゴル帝国の衰退に どのような影響を与えたのか

明朝時代における農業シフト

• 明朝に入り、商業から農業へシフト



- ・通貨の過剰な発行等による、<u>通貨システムの崩壊</u>
- 現物経済であること、そして徴税を現物で行っていたことから、 経済システムそのものは崩壊せず、むしろ順調であった(?)



- 経済と通貨は分けて考えなければならない。
- 本当にモンゴル帝国の衰退に影響を与えたのだろうか。たまたまタイミングが合っただけではなかったのだろうか。

問題意識:モンゴル帝国の没落は、体制崩壊としての「衰退」と見るか、或いは経済循環のような 好不況としての一時的「不況」と見るか。歴史的評価の物差しは何か。

モンゴル帝国と大英帝国等との比較・関係性から拓くグローバル・ヒストリーの視界(骨子)

1. モンゴル帝国が歴史において果たした役割~帝国の滅亡と衰退の歴史評価基準~

1日本の世界史教科書におけるモンゴル帝国の位置とは

〇世界史教科書の立ち位置とは。誰を対象とした教科書か。大国目線の歴史観、西洋(勝敗二元論、一神教価値観)優位の帝国·国民国家の発展段階論。世界史の日本史不在。歴史の個別性から全体連関性ある歴史発展のあり方へ視点転換。「見つつ観ざりき」からの脱却。

2歴史の本質とは

○歴史は、虚学か実学か。歴史の使命は、記録古書の堆積か、時代を生き抜く叡智·武器か。 人が必要とする歴史は、時代と共に変化する。為政者都合での書替·抹消は、歴史の常。それ でも、歴史の不合理·不条理を呑込み、史実の真実を捉えるためには、時代認識の研鑚必要。

321世紀を生きる時代認識とは

〇西洋優位の戦後の歴史教育への疑問意識。常識の再考。国民国家論の一国史枠組を超え、 地球規模の人類史発展のあり方を多角·多次元的に立体把握(部分知から全体知)。

⇒グローバル・ヒストリーとは、グローバル・スタディーズの視界。

2. グローバル・ヒストリーの視界に基づく基本分析・検証

- 〇各帝国·国民国家の統治·宗教·経済等の視点から、比較と相関性を分析・検証し、史実の真実·本質の所在を再確認する。その際の主なテーマと問題意識は、以下のとおり。
- ①「モンゴル帝国」と「中華帝国」を比較・相関
- ・大中華圏の原形は、漢民族ではなくモンゴル民族とする見方如何。中華のモンゴルか、モンゴルの中華か。中華民族の根拠と中国のモンゴルに対するトラウマの実相。
- ②「モンゴル帝国の東西交易」と「大航海時代」と「鄭和の大航海」を比較・相関
- ・高校歴史教科書では、世界一体化の始まりは大航海時代。モンゴル帝国時代との比較。
- ・大国史としての中華史観と西洋史観。東西の「中心と周縁」論と文化文明・発明度。
- 4「モンゴル帝国」と「ロシア帝国」を比較・相関
- ・タタールの軛とロシアのモンゴルに対するトラウマ。残虐モンゴル像に対する歴史認識。
- ・宗教的地政学の視界。宗教多様性重視のモンゴルと「第三のローマ」を目指すロシア。
- 5「ユニオンジャックの矢」と「大中華圏」を比較・相関
- ・ソフトパワーとネットワーク。西洋と東洋のGDP比較(160~)=東洋経済の優位性
- ⑥「大英帝国史」と「モンゴル帝国史」を比較・相関
- ・英国衰退とモンゴル帝国滅亡の現在の世界観。メルカトル図法論では、インドとスウェーデンは同じ国土面積。グローバル・ヒストリーの視界から見える世界観とは。

3. アジア・ダイナミズムとユーラシア央観

(1) アジアダイナミズム班10年の研究活動(仮説と実証分析)から見える視界~時代認識と今日的意義の再確認~

- ○朝鮮通信使と日中韓交流
- ・日中韓の共通利益(国家の平和と安定)と対馬藩の知恵。近代の西洋模倣と江戸期否定政策
- ○琉球国と東アジア交流
- ・海洋国家・琉球国(東アジア世界の交流拠点)と270年の日中両属支配と今。琉球国滅亡と残滓。
- ○四つ口(長崎・対馬・薩摩・松前)とアジア・ヨーロッパ交流
- ・国交なき交易の中、経済と情報の中心は、幕府ではなく四つ口。周縁・境界人の活躍。
- ○モンゴル帝国のユーラシア興隆・交流
- ・統治の正統性(漢民族でなく中華民族であることの意味)。中華帝国復興=国家の上位にある天下前提。

(2) 総括:世界認識の再構築について=今後の課題

- 〇現在の領域主義「国民国家論」(国力=領土)の視点では、国の歴史認識(=相互不和)の限界を超えられない。他方、個人主体のグローバルネットワーク力が活躍可能な時代。後者の存在感により、国家の歴史 認識に新たな段階も。例えば、年間1500万人(2017年大中華圏人の訪日数)は、生きた新しい歴史教科書。
- <u>〇領域性(国家)+関係性(ネットワーク性)の連関重視のアジアユーラシア・ダイナミズム史観=グローバル・ヒストリーの視界は、従来の国民国家論に対抗し得るソフトパワーを主体とした共通認識・土壌。</u>
- 〇人類史は戦争史。他方、人類の叡智としての「文化力」は、ヒトの破壊欲動を制御可。<u>モンゴル帝国</u>の崩壊は、ヒトの文化カ=国民の論理が存在しない帝国論理(収奪社会)の帰結。

「モンゴル帝国の興隆と衰退~比較と関係性から、現代に繋がる視界を考察~」

問題意識:モンゴル帝国の没落は、体制崩壊としての「衰退」と見るか、或いは経済循環のような好不況としての一時的「不況」と見るか。歴史評価の物差は何か

,	中国文明(中華帝国)		地中海・西ヨーロッパ文明		
覇権国家	モンゴル帝国 (13-14世紀)元	大清帝国(モンコ [*] ル帝国後継) (17-20世紀)	大英帝国 (19世紀)	オランダ (17世紀)	
1. 統治	周辺(夷狄)、大陸型 チンギス統原理(カリスマ性)	中核 天朝論理(正統、天下一家)	中核、海洋型 海外植民地型(東インド会社)	中核、海洋型 資源小国 (清教徒亡命·移住)	
2. 国家力 (行財政·軍事力)	小さな政府(部族連合・遊牧民 論理)、騎兵力 タタールの軛(ロシア・中国史のトラウマ)	大きな政府 (科挙·官僚制を継承)、定 住民社会	大きな政府(高い行財政能力、 軍事は議会に従属、富の動員 (課税・商業社会)	小さな政府(自治権有する都 市連合) 、通商国家(商業金 融)	
3. 経済競争力 (経営・産業力・資源)	ユーラシア交易ネットワーク(遠距離貿易)。 世界初不換紙幣(信用取引)	世界GDP20-30% (明·清時代)	ジェントルマン資本主義(金融、エンジニ アリング)、二つの三角貿易(英印中/奴隷貿易)	バルト海貿易、造船業、近郊・ 換金作物農業、オランダ東インド 会社(17拠点2.5万人)	
4. <mark>宗教</mark> 文化 (行動規範・非合理)	多様性温存(多様な文化吸収) 宗教に寛容・共生共存	漢字文化圏 (儒教·漢訳仏教·律令)	国際公共財(英語·英国法·み゚-ッ)、節度·穏健態度·正義、キリスト教海外伝導協会	プロテスタンティズムの倫理	
6. 民力 (豊かさ・所 得・都市農村力)	モンコ゚ル人2%、多民族登用、実務 能力重視	満州人+同盟(モンゴル人, 漢 人)⇒漢人提携(満漢一家)	非経済合理主義(社会的威信) 食文化衰退(調理法〈熱量)	法の下平等·民主的意思決 定·多様価値尊重·宗教自由	
7. 未来性·潜在力	国民国家システムでは人口=国力 「世界はモンゴルの末裔」の意味	大中華圏(華人·華僑ネットワーク)、 中華帝国の復興(民族宗教を 超越)	英連邦と「ユニオンジャックの矢」 (ソフトパワーとネットワーク力)	米国社会の基底	

- ●モンゴルの「帝国」型統治は、統合の緩やかさ・構成員の多様性共存に寛容。大英帝国「国民国家」(19C-)統治は、統合重視(一体性・均質性)、多様性(言語・民族・宗教)共存には不寛容。
- ●仮に国民国家の体制に次段階があるとすれば、モンゴル帝国興亡の本質·真実(事実ではなく)探求の中から、現代に繋がる視界が見えてくるのではないか。

世界各地域のGDP割合」16世紀の大航海時代、19世紀大英帝国よりもアシア・中国優位の事実

単位:10億ドル、()内は%

	1500年 大航海時代 宗教改革	1820年 大英帝国時代	1913年 第1次世界大戦 1914-18	1950年 朝鮮/中東戦争	2000年 冷戦終結1991-	2014年 習近平の中国 2012-
アジア 日本 中国 インド	8 (3.1) 62 (24.9) 61 (24.4)	413 (59. 4) 21 (3. 0) 229 (32. 9) 111 (16. 0)	680 (24. 9) 72 (2. 6) 241 (8. 8) 204 (7. 5)		13, 762 (37. 7) 2, 669 (7.3) 4, 330 (11.9) 1, 924 (5.3)	4, 606 (5. 9) 10, 431 (13. 4) 2, 055 (2. 6)
西3一ロッパ 英国	44 (17. 8) 3 (1. 1)	160 (23. 0) 36 (5. 2)	902 (33. 0) 225 (8. 2)	1, 396 (26. 2) 348 (6. 5)	7, 430 (<mark>20. 4</mark>) 1, 180 (3. 2)	2, 989 (3. 8)
アメリカ	1 (0. 3)	13 (1.8)	517 (18. 9)	1, 456 (27. 3)	7, 942 (21. 8)	17, 348 (22. 2)
世界合計	248 (100)	695 (100)	2, 732 (100)	5, 330 (100)	36, 502 (100)	78, 046 (100)

出典:1500年~2000年実質GDP推計:アンガス・マディソン(金森久雄訳・政治経済研究所訳『経済統計で見る世界経済2000年史』(柏書房、2004年)より作成

2014年名目GDP:総務省統計局『世界の統計2016年』より作成

経済システムと産業の変遷

1760年一	1870年一	1995年一	2030年一(予測)	
機械化経済(資本主義)		機械化経済(資本主義)サービス・情報産業	純粋機械化経済、サービス情報産業	
工業		特化型AI時代 *ビッグデータ=現代の石油	汎用AI時代=データリズムの時代	
第1次産業革命 (蒸気機関)英国	第2次産業革命	第3次産業革命	第4次産業革命=米中デジタル戦争	
	(内燃機関·電気モーター)米国	(パソコン・インターネット)米国・中国	(汎用AI・デジタルエコノミー)	

出典:寺島実郎『寺島実郎の時代認識』資料集2018年夏号(グローバルインフォメーションネットワーク総合研究所、2018年)より作成

井上智洋『人工知能と経済の未来』(文春新書、2016年)より作成

フィールドワーク

- 1. 訪問地:<u>中国 北京市</u>(7名)
 - (1)日 程:2018年8月13日(月)~16日(木)3泊4日
 - (2)調査先:
 - ①南開大学 歴史学院 准教授 馬 曉林氏 元朝の国家祭祀など
 - ②中国社会科学院 歴史研究所 主任研究員 阿 風 氏 安徽省徽州府の元~清の動態調査
 - ③中国人民大学 清史研究所 教授 張 永江氏 清代のモンゴルなど藩部の研究
 - 4妙王寺・白塔 モンゴルがつくった寺院 5雍和宮 チベット仏教寺院
 - ⑥元大都城垣遺址公園 モンゴルがつくった北京城の城壁
 - ⑦故宮(紫禁城) 8玉河遺址博物館 モンゴル帝国の作った北京への導水路
- 2. 訪問地: モンゴル ウランバートル市(2名)
 - (1)日 程:2018年8月29日(水)~9月4日(火)6泊7日
 - (2)調査先:
 - ①博物館·寺院·歴史的建造物 ②日系企業·国際NPO
 - ③遊牧民家族訪問 ④モンゴル財政経済大学

ご清聴ありがとうございました